福　岡　市

有田・小田部

第13集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第265集

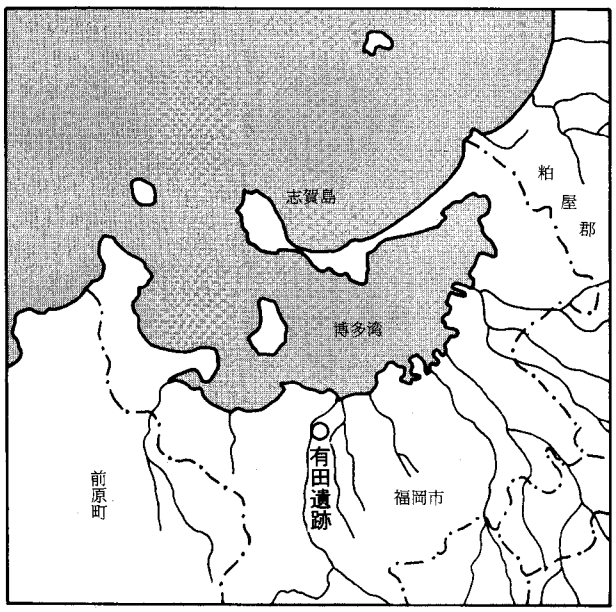
1991

福岡市教育委員会

有田（ありた）・小田部（こたべ）

— 第152次調査の記録 —

第13集



1991

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄海灘をはさんで，大陸とは一衣帯水の位置関係にあり，古代から大陸文化受け入れの窓口として栄えて来たところです。特に本市の西南部に位置する早良平野は文化財が数多く包蔵され，早良王墓で有名な吉武高木遺跡や弥生の環濠集落として国指定史跡となっている野方遺跡など重要な遺跡があります。この平野の北部に位置する有田遺跡群は，旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で，昭和41～43年にかけての区画整理事業に伴う調査以来，現在迄160次を越える調査が行なわれており，弥生時代初頭の環濠集落や古墳時代の集落，奈良時代の官衙規模の建物群，戦国時代の小田部城に関連する濠跡などの重要な遺構が発見され，学界の注目を集めています。

今回の報告は，小田部地区で行なわれた，民間の共同住宅建設に伴うもので，弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が発見されました。

今回の調査及び報告書作成にあたっては，事業者の照栄建設をはじめ，地元の皆様，また関係各社の皆様に多大なご理解とご協力を得ましたことに対し，深く感謝の意を表します。併せて，本書が埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり，また研究資料としてご活用いただけることを願うものです。

平成３年１月10日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　言

1．本書は，平成元年度に福岡市教育委員会が実施した民間の共同住宅建設に伴う有田遺跡群内の第152次調査の報告書である。

2．本調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課第２係山崎龍雄が担当した。

3．本調査の遺構の実測は担当者の他，黒田和生，英豪之，溝口武司，金子由利子，清原ユリ子らが当たり，写真は山崎が行った。遺構・遺物の整理・浄書は担当者の他，平川敬治，井上加代子，岡根なおみが当った。

4．本書に使用した方位はすべて磁北である。

5．遺構の呼称は記号化し，竪穴住居址→ＳＣ，掘立柱建物→ＳＢ，土坑→ＳＫ，ピット→ＳＰ，その他の遺構→ＳＸとした。なお遺構番号は種類に関係なく連番とした。ただし，ＳＰはＳＰだけで番号を付した。

6．本書に関わる記録類・遺物類は恒久的な収蔵保管・活用のために福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

7．本書の執筆・編集は山崎が行ったが，27の石器については埋蔵文化財課の小畑弘己に整理・原稿を依頼した。

8．調査に係る要項は下表のとおりである。

遺跡調査番号	8953		遺跡略号	ＡＲＴ	
調査区地番	早良区小田部５丁目48・49		分布地図番号	原　82	
申請面積	873m²	調査対称面積	873m²	調査実施面積	770m²
調査期間	1987年10月27日～11月21日		事前調査番号	63－２－524	

本　文　目　次

本文頁

第１章　はじめに ……1
　1　調査に至る経過 ……1
　2　調査体制 ……1
第２章　遺跡の立地と歴史的環境 ……2
　1　遺跡の立地と歴史的環境 ……2
第３章　調査の記録 ……4
　1　調査の概要 ……4
　2　遺構と遺物 ……7
　3　小結……14

挿　図　目　次

Fig.　1　有田遺跡群周辺の遺跡（1／25,000）……3
Fig.　2　調査区周辺の調査地点（1／5,000）……4
Fig.　3　152次調査遺構配置図（1／200）……折り込み
Fig.　4　SC05出土遺物（1／4）……6
Fig.　5　SC05（1／60）……折り込み
Fig.　6　SC06（1／60）……7
Fig.　7　SC07（1／60）……8
Fig.　8　SC07出土遺物（1／4，1／3）……9
Fig.　9　SC11・12（1／60）……10
Fig. 10　SC11・12出土遺物（1／4，1／3）……11
Fig. 11　SK08出土玉（1／1）……13
Fig. 12　SB09・13・15，SK10（1／100，1／30）……13
Fig. 13　SX01・04南壁土層図（1／60）……14
Fig. 14　SX01・ピット出土遺物（1／4）……14
Fig. 15　SP19出土石器（1／1）……15
Fig. 16　SC05部屋別概念図（1／120）……15

図　版　目　次

ＰＬ１　(1)　調査前全景（南東から）
　　(2)　調査区東側全景（西から）
ＰＬ２　(1)　調査区西側全景（北西から）
　　(2)　SX01・04（南東から）
ＰＬ３　(1)　SC05（北西から）
　　(2)　屋内土坑 SK08（北から）
　　(3)　同完掘状況（北から）
ＰＬ４　(1)　SC06（北西から）
　　(2)　SC07（北西から）
ＰＬ５　(1)　SC11・12（南東から）
　　(2)　SC11焼土面（南東から）
　　(3)　遺物出土状況（南西から）
ＰＬ６　(1)　SB09（東から）
　　(2)　SB13（南東から）
　　(3)　SB15（北東から）
　　(4)　SK10（南西から）
ＰＬ７　各遺構出土遺物

表　目　次

本文頁
表１　掘立柱建物一覧表……12
表２　遺物一覧表……16

第1章　は　じ　め　に

１．調査に至る経過

通称今宿バイパスの国道202号線バイパスの開通と福岡市営地下鉄の開通は，従来小田部大根の産地として有名であった純農村地帯の有田・小田部地区を一変させた。沿線には，店舗や共同住宅，個人住宅が建ち並び，往時の面影を見る事は次第に難しくなって来ている。そういう状況の中で平成元年１月，調査区に共同住宅建設の申請が提出された。これを受けて埋蔵文化財課は平成元年３月に事前調査を行ない，埋蔵文化財を確認した。本課としては現状保存を前提に協議を行ったが，計画の変更は難しく，調査費用を原因者が負担し，記録保存するという事で，協議がまとまった。発掘調査は重機による表土除去から始まり，平成元年10月26日～11月21日迄実施した。調査面積は申請面積873㎡中770㎡である。また整理作業は平成２年度に行なった。

２．調査体制

調査委託　照栄建設社長　前畑一人

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　福岡市教育委員会埋蔵文化財課長，柳田純孝　同第２係長，柳沢一男

調査担当　庶務担当　第１係　阿部徹（平成元年度）　中山昭則（平成２年度）
調査担当　第２係　山崎龍雄

調査補助　黒田和生　英豪之　溝口武司

整理補助　平川敬二　井上加代子

調査作業　神尾順次，三浦義隆，金子由利子，清原ユリ子，佐藤テル子，柴田常人，徳永ノブヨ，舎川ハルエ，西尾タツヨ，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾鈴子，門司弘子，萬スミヨ，松尾キミ子

整理作業　井上マツミ，内尾トミ子，池田礼子，岡根なおみ，長橋厚子，松下節子，吉田祝子，中原尚美

この他，調査にあたっては事業者の照栄建設をはじめ地元の方々から多大なご理解とご協力を得た。記して感謝の意を表します。

第2章　遺跡の立地と歴史的環境

1．遺跡の立地と歴史的環境（Fig. 1）

博多湾に北面して扇形に展開する福岡平野は西側を長垂丘陵，東側を三群山系の月隈丘陵によって限定されている。早良平野はその福岡平野の一部として西南部に位置する小平野で，沿岸の海岸砂丘部と室見川水系によって形成された沖積地によって構成されている。今回の調査区のある有田遺跡群はこの早良平野の北側，室見川右側にある最大標高15m前後を測る独立中位段丘上にある。この段丘は室見川や金屑川によって浸食を受け，北に八手状に台地が広がる独特の形状を呈している。有田遺跡群が所在する有田・小田部の台地は，古代には早良郡田部郷，近代は早良郡原村に所属していた。遺跡の所在地は早良区小田部5丁目49・48である。

また有田遺跡群の周辺の歴史的環境については本市報文の『有田・小田部』などで，述べられており，ここでは述べない。当遺跡群に関連する報告書は以下のとおりである。

有田遺跡群関係文献一覧

①『有田古代遺跡調査概報』市報第1集，1967（1次）
②『有田遺跡－福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告－』市報第2集，1968（2次）
③『有田周辺遺跡調査概報』市報第43集，1977（3次）
④『有田・小田部』現地説明会資料（孔版），1977（4・5・6次）
⑤『有田遺跡』（孔版），1979（9・10・11・12・13・14・15・16次）
⑥『有田・小田部第1集』市報第58集，1980（17・21・22・23・24・25・26・27次）
⑦『有田・小田部第2集』市報第81集，1982（7・8・28・29・31・33・34次）
⑧『有田・小田部第3集』市報第84集，1982（59次）
⑨『有田七田前遺跡』市報第95集，1983（62次）
⑩『有田・小田部第4集』市報第96集，1983（19・32・36・37・38・40・41・42・45次）
⑪『有田・小田部第5集』市報第110集，1984（30・44・46・47・48・49・55・63・75次）
⑫『有田・小田部第6集』市報第113集，1985（5・39・51・53・56・57・66・76・86次）
⑬『有田・小田部第7集』市報第139集，1986（52・59・60・82・83・87・95・97・101次）
⑭『有田遺跡群』市報第129集，1986（81次）
⑮『有田・小田部第8集』市報第155集，1987（3a・43・64・108次）
⑯『有田七田前遺跡の調査』九州文化史研究紀要32号，1987（104次）
⑰『有田・小田部第9集』市報第173集，1988（35・70・71・72・102・105・109・111・117・122次）
⑱『有田・小田部第10集』市報第212集，1989（100・103・130・134次）
⑲『有田・小田部第11集』市報第234集，1990（107・113・120・131・133・146・149次）
⑳『有田・小田部第12集』市報第264集，1991（119・121・126・127・128・129・144・156・157・162次）
㉑『有田・小田部第14集』市報第266集，1991（118・123・139・155・161次）

Fig.1 有田遺跡群周辺の遺跡（1/25,000）

第3章　調 査 の 記 録

１．調査の概要

調査区は福岡市早良区小田部５丁目48・49に所在する。北に八手状に分岐して広がる有田・小田部台地の北側の西から２番目の台地の西側斜面上に立地し，調査前の現況は畑地であった。

調査区周辺は７ケ所調査されているが，まだ比較的農地が残っている地域である。調査区の南側は第15次･114次調査が行なわれており，弥生時代の円形住居址，古墳時代前期～後期にかけての住居址，平安時代の掘立柱建物群などが検出されている。がしかし，地区としては調査例が少ないため，余り遺跡の実態が把握出来ていない。

今回の調査では遺構は東側で表土20cmの深さ，西側で表土35cm と暗褐色粘質土45cm の深さ80cm で検出した。標高としては西から東へ6.5～7.5m を測る。遺構面は黄褐色砂質ロームから橙色ローム土である。遺構は斜面である西南部で多く検出した。東側は近世から近代にかけての大型の攪乱土坑があったが，削平により遺構は少なく，残りも悪かった。これは南側の第114次調査区でも同様であった。検出した遺構は弥生時代竪穴住居址１棟，古墳時代竪穴住居址４棟，掘立柱建物３棟，焼土坑１基である。出土遺物は総量でコンテナ２箱と少ない。弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器・中近世の遺物・滑石製臼玉などがある。

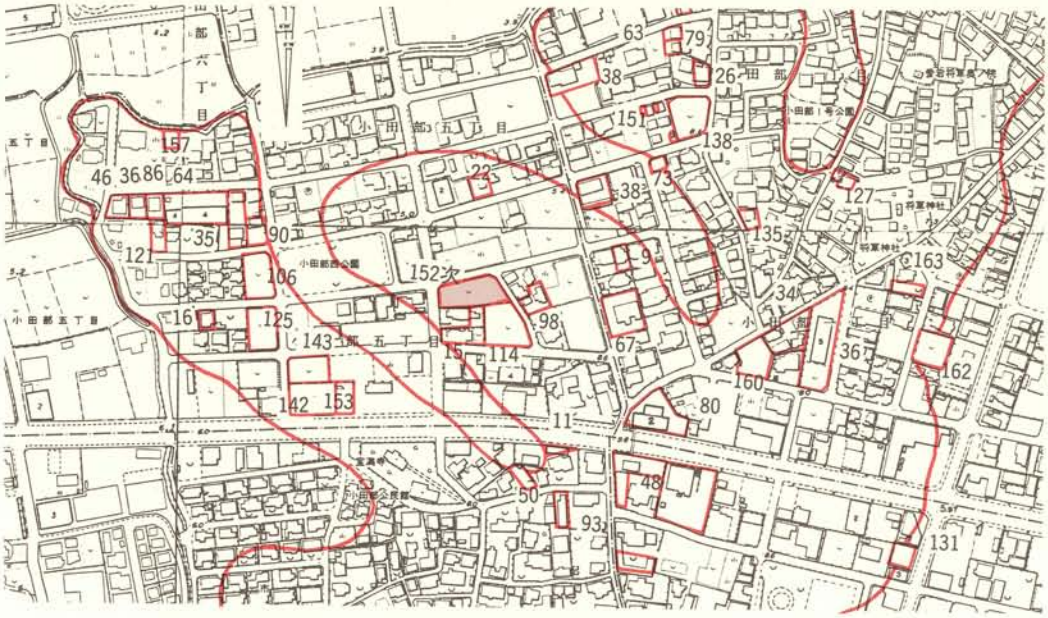


Fig.2 調査区周辺の調査地（1/5,000）

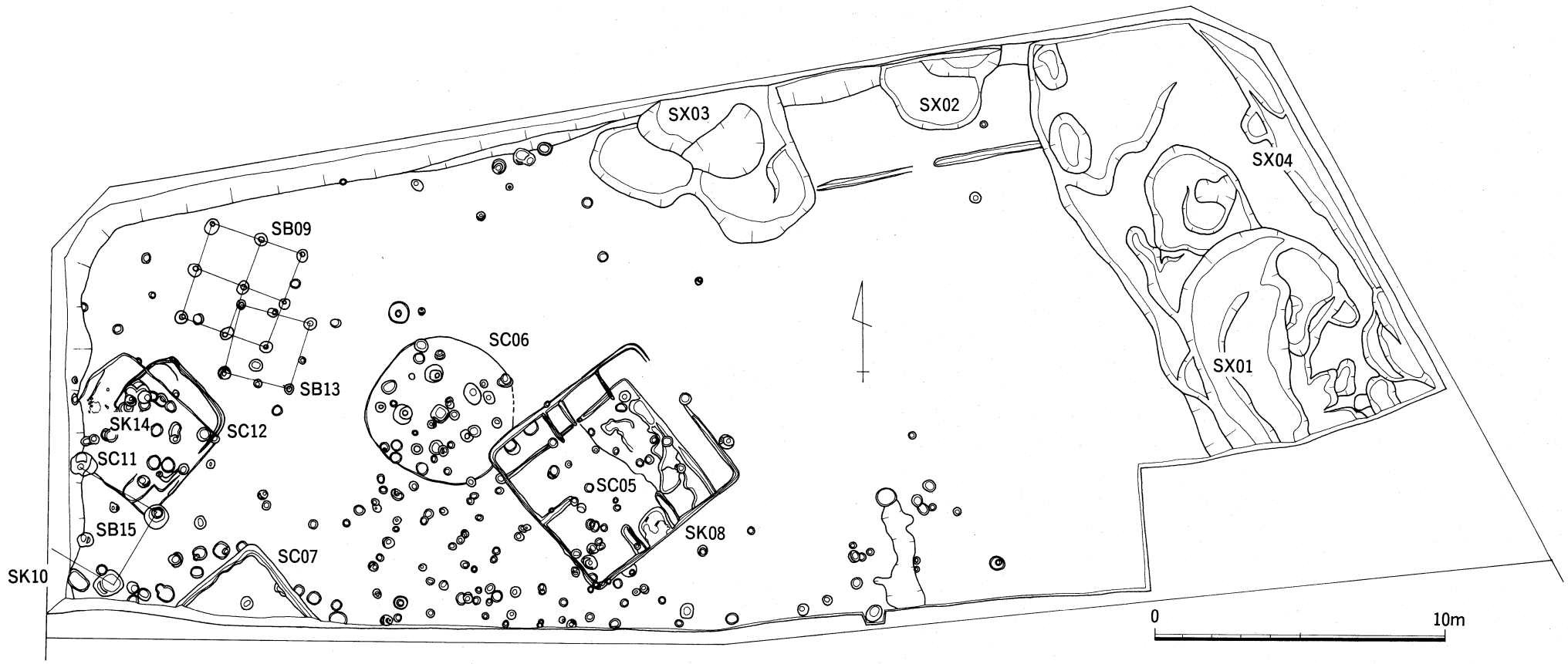


Fig.3 第152次調査区遺構配置図（1/200）

２．遺構と遺物

竪穴住居址

SC05（Fig. 5，PL. 3）

調査区中央西寄りで検出した。主軸方向を南西から北西に取る，平面形状が方形を呈す住居址。全体に残りは悪い。規模は6.20×6.32m，残存壁高は最大５cmを測る。各壁には幅10～25cm，深さ10cm前後の浅い溝が巡る。また北西壁と北東壁1～1.1m内側に壁に並行して矩形に巡る小溝があり，各周壁から直交する小溝と伴にベッド状遺構の名残りを残している。内部の矩形の小溝に囲まれる部分は5.1×5.4mで，その東側1.6～2.2mの範囲の床面は黒褐色土と黄褐色土の混合土で特によくしまり，日常よく使われていた事を窺わせる。それらを除去すると，地山面の凹凸とともにピットを数個検出した。

主柱は４本で，壁から1.50m前後内側にある。またその間に間柱ともいうべき柱が２本ある。各柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２が3.20m，Ｐ１－Ｐ５が2.20m，Ｐ５－Ｐ２が1.0m，Ｐ３－Ｐ４が3.10m，Ｐ３－Ｐ６が1.0m，Ｐ６－Ｐ４が2.10m，Ｐ２-Ｐ３が3.40m，Ｐ４－Ｐ１が3.50mを測る。Ｐ１～Ｐ２，Ｐ３～Ｐ４の柱筋は通っていない。柱穴はいずれも円形で，規模は25～35cm，深さ35～50cmを測り，４隅の主柱は特にしっかりしている。内部施設は南東壁やや西寄りに一辺が1.10m前後，深さ15cmを測る隅丸長方形の土坑(SK08)があり，炭化物・焼土塊が壁沿に堆積していたが，焼土面は見られなかった。SK08を炉部と見るならば，出入口部はその反対側の北西壁中央２条の仕切り溝に挟まれた幅50cmの部分が出入口の可能性がある。

出土遺物（Fig. 4，PL. 7） 床面，主柱穴からの出土は少なく，図示出来る遺物はSK08からのものである。遺物としては土師器・黒曜石の剝片，磨石，滑石製臼玉などがある。

１～４は土師器。１・２は小型丸底壷。１は底部を欠失し，かなり歪む。復元口径9.2～9.5cmを測る。口径は体部径より若干大きい。ナデ仕上であるが，器壁はやや荒れる。２は口縁部1／６片で，復元口径10.0cmを測る。１とほぼ同様の器形で，ヨコナデ仕上である。体部外面はケズリ加える。３・４は高杯脚部片。３は復元脚端径17.0cmを測る。脚部は大きく開き，端部は屈折して外に水平に延びる。杯部と脚部の境にタテ刷毛が残るが，全体に調整は不明。内面に指おさえ痕が残る。４は復元脚端径11.8cmを測る。やや膨みを持った筒部から外湾して外へ開く器形。外面の調整は不明瞭だが，内面は指おさえ痕が残る。５は長楕円形の偏平な磨石。長さ25.1cm，幅10.1cm，厚さ4.1cmを測る。上面には擦痕が残るが，表面の剝離は著しい。石質は細粒砂岩と思われる。22は滑石の臼玉で直径４㎜，高さ1.5㎜，孔径２㎜を測る。

SC06（Fig. 6，PL. 4）

SC05の北西側で検出した円形住居址で，残りは極めて悪い。直径５ m，残存壁高は５cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であった。主柱は５本柱。壁から0.9～1.1m内側を巡る。各柱間距離

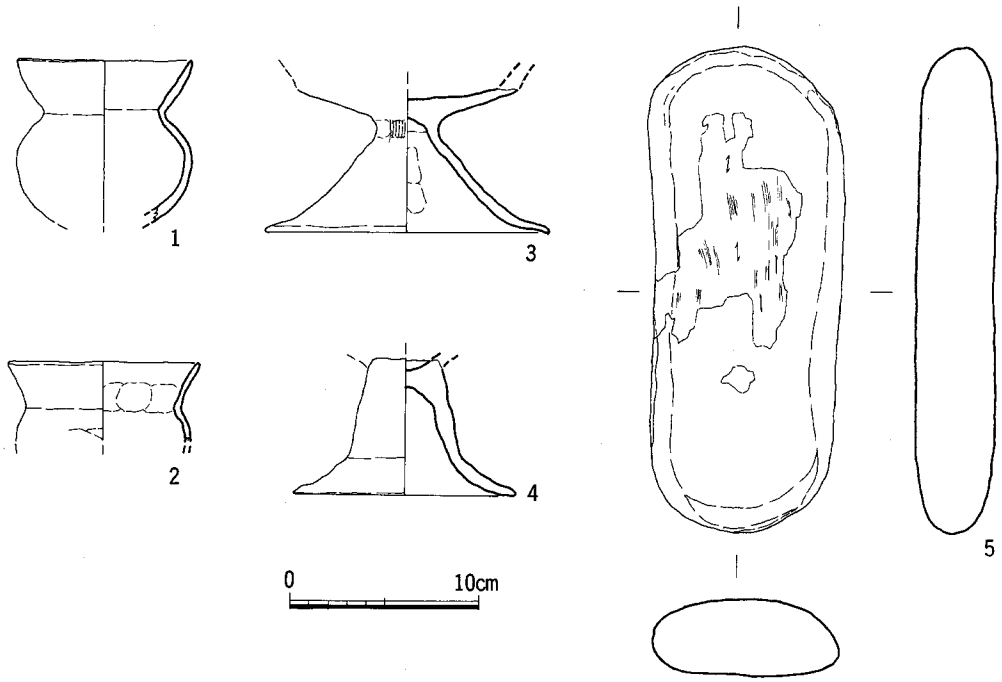


Fig.4 SC05 出土遺物 (1/4)

はＰ１－Ｐ２が1.50m，Ｐ２－Ｐ３が1.20m，Ｐ３－Ｐ４が1.60m，Ｐ４－Ｐ５が1.70m，Ｐ５－Ｐ１が1.35m を測る。柱穴は円形又は楕円形で，直径45～75cm，深さ50～80cmを測る。一度大きな掘り方を掘り地山粘土でつきかためて，その中に柱を入れ，そして埋めて柱を固定しているようである。また住居址床面中央には一辺が55cm，深さ15cmを測る，断面が逆台形を呈す浅い略方形状の土坑があり，その北東－南西軸上に１対の直径30cm前後，深さ30～35cmのピットがあった。この住居址は中間研志氏のいう松菊里型住居址の類に当たるものである。

出土遺物　弥生土器の細片が５点，石器の剝片が１点出土した。

SC07（Fig. 7，PL. 4）

調査区南西境界地で検出した住居址で，北側コーナー部分のみ確認した。確認規模は北西・北東壁2.7m，残存壁高25～45cmを測り，遺構の残りは良い。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。床面は北東側壁沿に黄褐色地山粘土で貼床しており，それを取除くと，10cm程一段落込む。壁溝は幅15cm前後で全周するものと考えられる。主柱はＰ１のみ確認したが，形態から４本柱である。柱穴は円形で，直径45cm，深さ90cmを測る。この柱穴は，埋土下層で確認しており，柱が立ったまま朽ちたのであろう。内部土坑などはなかった。主軸の方向などから見て，SC05に近い形態の住居址になると思われる。

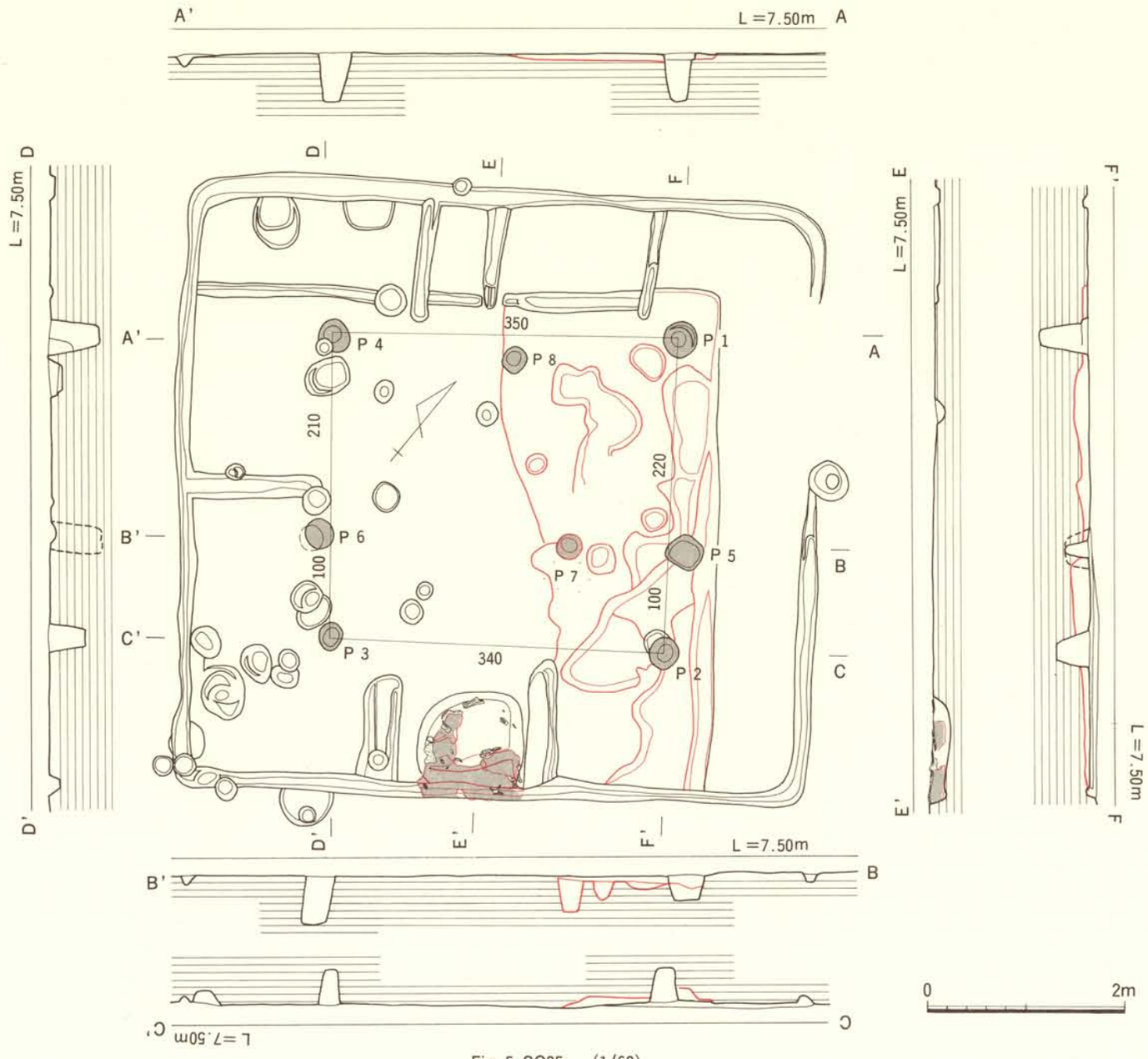


Fig.5 SC05 (1/60)

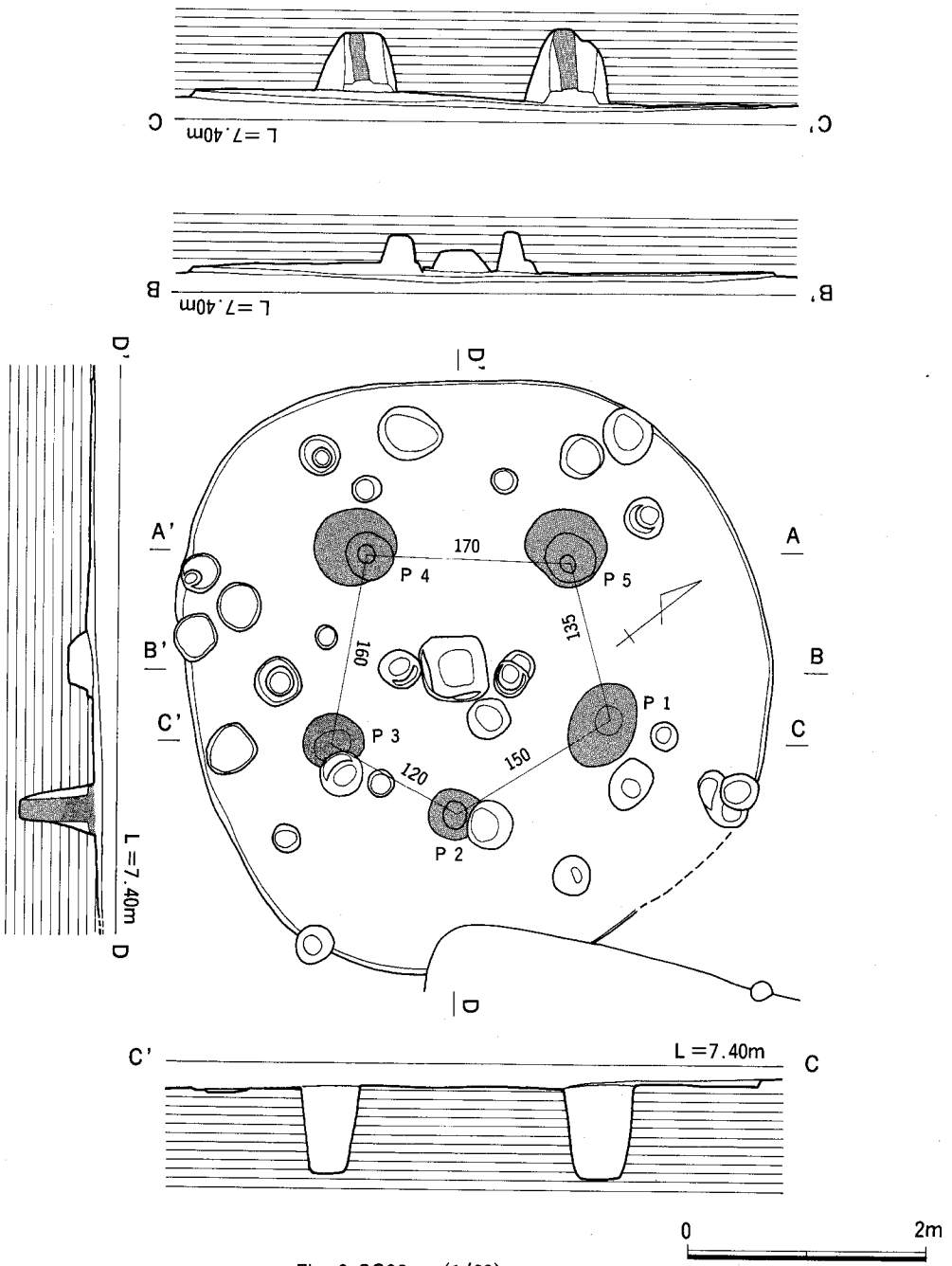
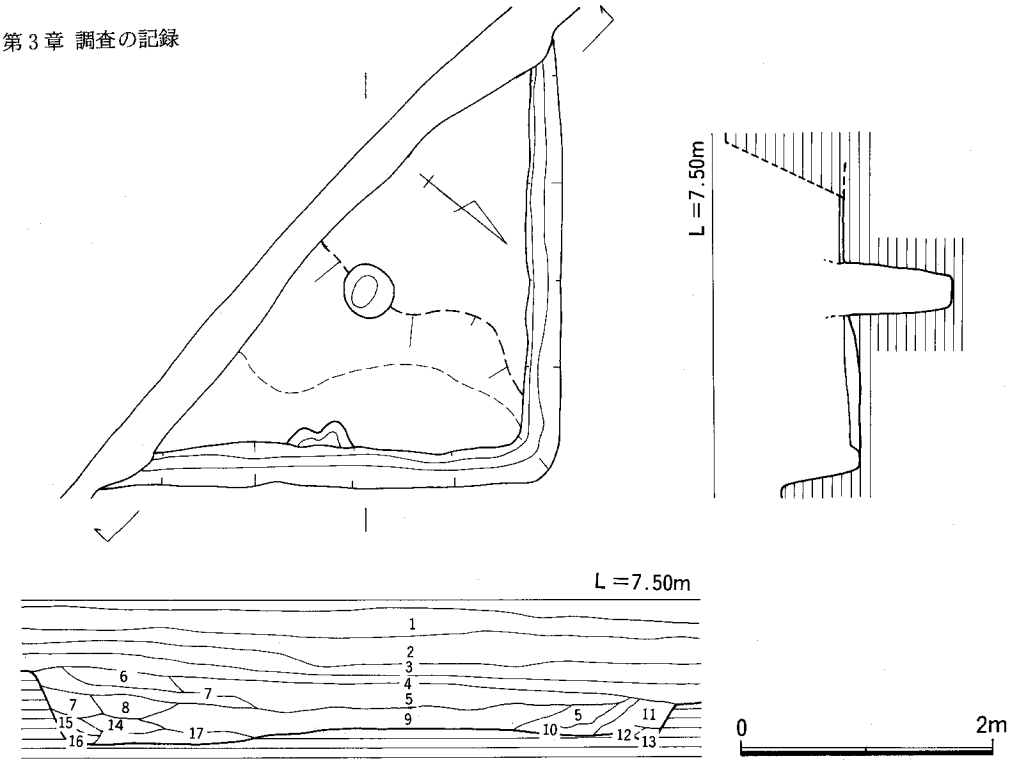


Fig.6 SC06 (1/60)

出土遺物（Fig. 8，PL. 7） 埋土中から弥生土器から古墳時代の土師器の甕・鉢・壷・高杯が多く，須恵器の小片が2点，炭化物，黒曜石の剝片が4点出土した。またP1より，弥生土器



土層名称

1．黒褐色土（表土、耕作土）
2．暗褐色土（耕作土）
3．暗褐色粘質土
4．　　〃　　（３よりやや褐色味が強い）
5．黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合
6．暗褐色粘質土に黒褐　色粘質土ブロック少量混入
7．６に橙色ロームブロック少量混入
8．暗褐色粘質土と橙色ロームブロック混合
9．８に黒褐色粘質土を更に混入
10．暗褐色粘質土に橙色・明黄褐色ロームブロックをやや混入
11．黒褐色粘質土に暗褐色粘質土・明黄褐色地山粒子を少量混入
12．暗褐色粘質土に明黄褐色ロームブロックをやや混入
13．黄橙色ロームブロックに黒褐色粘質土ブロック少量混入
14．黒褐色粘質土と暗褐色粘質土と橙色ロームと明黄褐色ロームブロックの混合
15．橙色ロームと明褐色ロームと暗褐色粘質土の混合
16．黒褐色粘質土と橙色ロームブロックの混合
17．明黄褐色ロームと橙色ロームブロックの混合

Fig.7 SC07　(1/60)

や土師器の甕，砥石など出土している。

６～10は土師器。６は丸底壷の口縁部1／3。復元口径10.4cmを測る。口縁部は内湾気味に先端が直立する。調整は内面はハケのちナデ，外面はヨコハケのちナデ。７は壷又は甕の口縁部片，復元口径15.0cmを測る口縁部はく字状に外へ開く。外面はタテ又はヨコ刷毛，内面はヘラ削り。８は甕又は壷の口縁部1／6片。復元口径16.2cmを測る。口縁部の開きは弱い。内外面共ヨコナデ又はナデ。９は鉢の1／4片。復元口径7.6cmを測る。口縁部と体部の境に頸部の名残りを残す屈折線がかすかに入る。外面はナナメ刷毛，内面は指おさえ後ヨコ刷毛又はナナメ刷毛である。10は高杯の杯・脚部片。口径16.0cmを測る。杯部は底部と体部の境に明瞭な段が付く。脚部は外に大きく開く。杯部外面にはナナメ刷毛，内面にはヨコハケ。脚部内外面はナデ。11は主柱Ｐ1(SP28)から出土した砥石。現存長さ８cmを測る。全面使用されている。特に各側辺

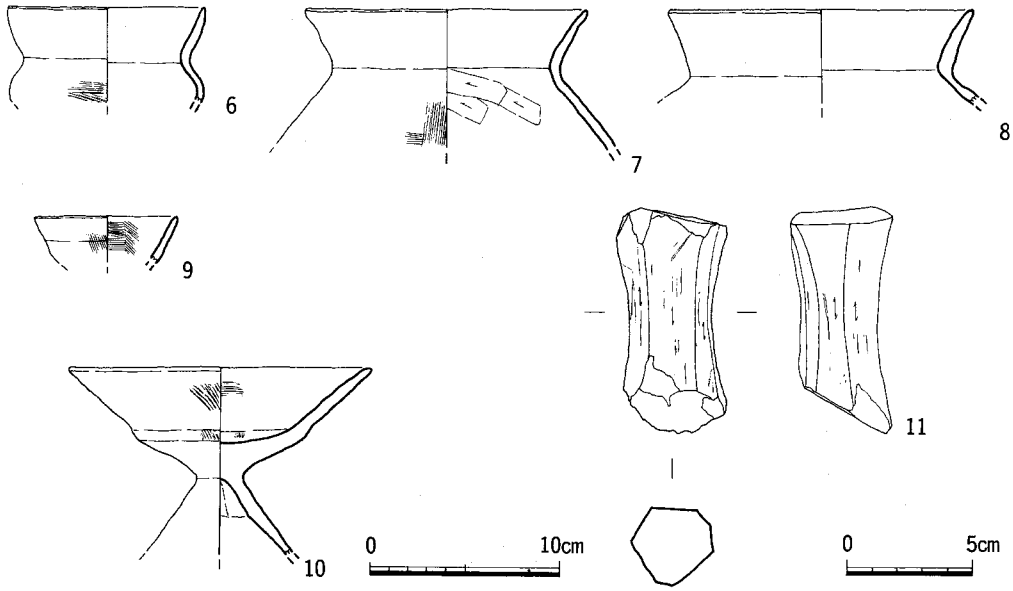


Fig.8 SC07 出土遺物 (1/4, 1/3)

は使用が激しくひどくすり減っている。色調は黄白色を呈す。石質には目の細かいアプライトであろうか。手持ちの仕上砥石で，金属利器を研いたものであろう。7・11共P 1出土である。

SC11 (Fig. 9, PL. 5)

調査区西側で検出したSC12を切る住居址で，南西隅は崖に，南西壁はSB15に切られる。平面形状は長方形で，規模は長さ4.78m，幅3.90m，残存壁高は12cmを測る。全体に残りは悪い。床面はSC12より一段下がり，やや汚れる。周壁溝は認められなかった。埋土は黒褐色粘質土である。主柱は4本柱で，平面形は円形又は楕円形で，規模は直径35～45cm，深さは50～60cmを測る。柱穴間距離はP 1－P 2が1.85m，P 2－P 3が2.25m，P 3－P 4が1.85m，P 4－P 5が2.05mを測る。北西壁中央，壁より40cm位離れた所に直径40cm程の焼土面があり，そこにカマドが付設されていたと思われる。この住居址に伴う，屋内土坑は認められなかった。

出土遺物 (Fig. 10, PL. 7) 須恵器の杯身・蓋・甕，土師器椀・甕，弥生土器，鉄滓3点，石器の剝片，石製品と思われる軽石の小片などが出土した。

12～16は須恵器。12・13は杯蓋。12は1／4片で，復元口径13.4cmを測る。天井部と口縁部の境に段がつく器形。天井部2／3は回転ヘラ削り。口縁内外面はヨコナデ。13は12と同様の器形で1／3片。復元口径12.0cmを測る。12に比べて，口縁端部内面に明瞭な段がつく。14・15は杯身。14は1／4片で，復元口径10,6cm，受部径13.0cmを測る。立上りは高いがやや内傾する。底部2／3は回転ヘラ削り，その他はナデ。15は口径12,0cm，受部径14.2cmを測る。底部1／2は回

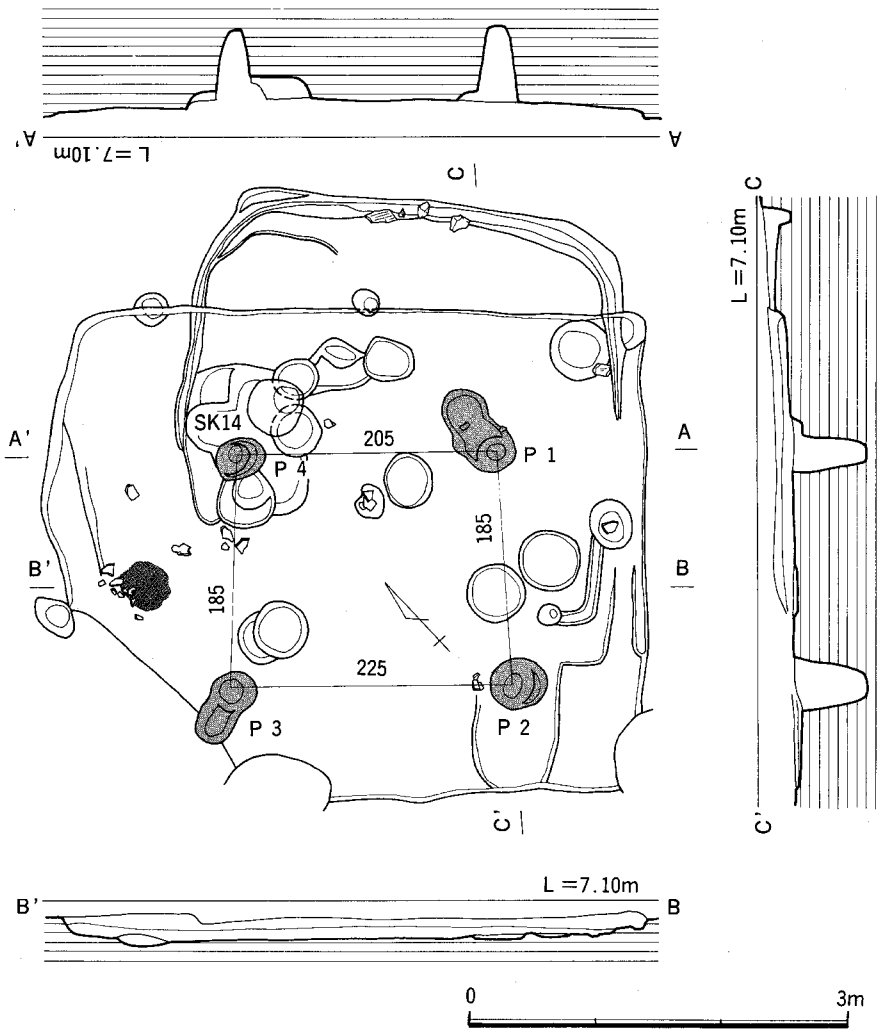


Fig.9 SC11・12 (1/60)

転ヘラ削りで，その他はヨコナデ又はナデ。底部には平行する3本の線状のヘラ記号がある。SP60のものと接合した。16は甕の底部片。内面は同心円叩き，外面は木目直交横位叩き。17～20は土師器。17は坩の体部1／4片。外面は器壁が荒れ調整不明。内面は指おさえ痕が残る。18は広口の甕で，復元口径23.0cmを測る。1／10片の為，口径に若干疑問が残る。口縁部はく字状に外湾する。内外面の調整は不明。19・20は高杯で，19は筒部の小片。内外面は器壁が荒れ調整不明。20は脚裾部1／3片。脚端径は15.0cmを測る。膨らんだ脚部から裾部は外折し，水平にのび端部を尖り気味におさめる。

SC12 (Fig. 9，PL. 5)

SC11に切られ，北側部分のみを確認した。最大幅3.45m，残存壁高15cmを測る。周壁溝は確

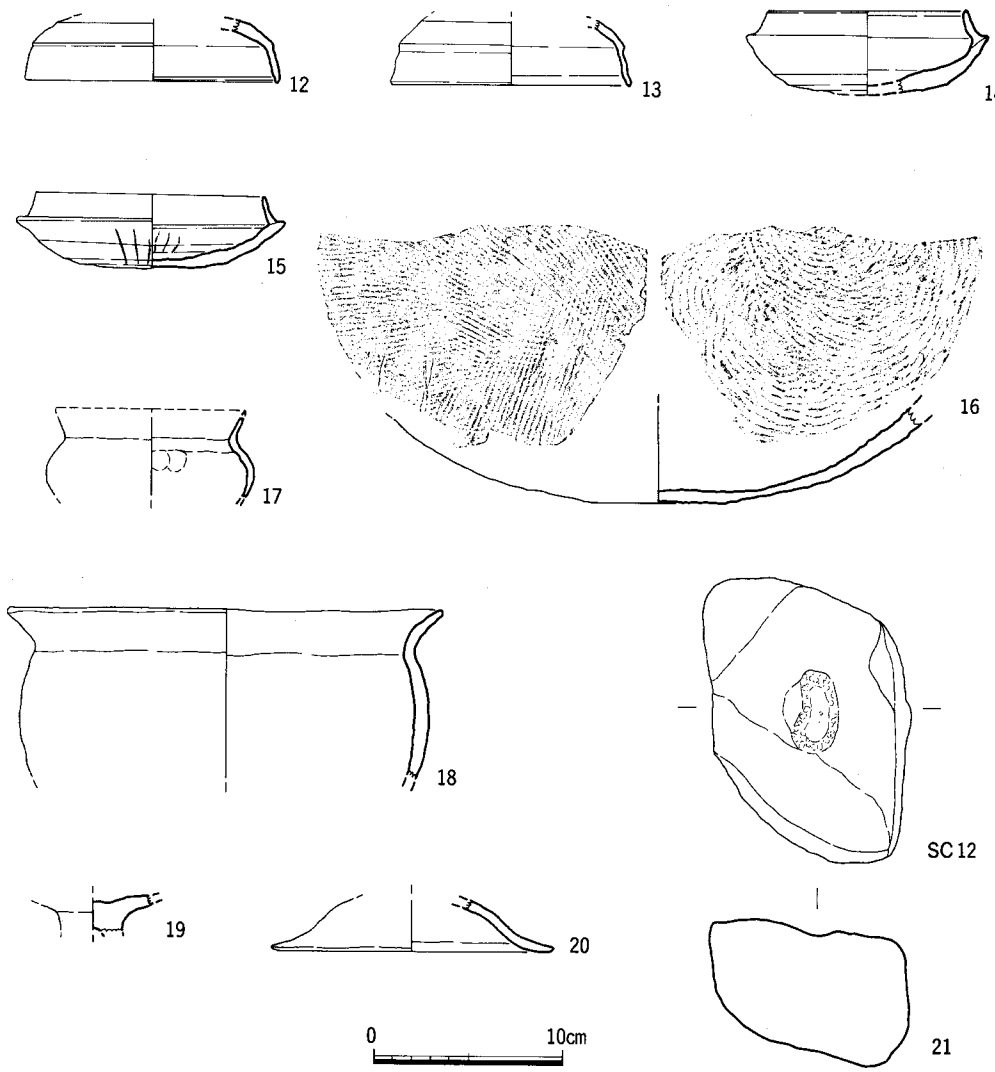


Fig.10 SC11・12 出土遺物 (1/4)

認部については確認した。主柱はわからない。炉についても不明。屋内土坑については北西壁沿で確認した1.15×0.70m，深さ15cmの不整長方形の土坑SK14が伴うと思われる。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物（Fig.10，PL. 7） 土師器の細片が16点ほどと，凹石，黒曜石の剝片が出土した。21は凹石で，長さ15.1cm，幅10.6cm，高さ7.0cmを測る。上面に使用による窪みが残っている。

掘立柱建物

SB09（Fig. 12，PL. 6）

調査区北西隅で検出した主軸方位をN-21°-Eに取る２×２間の総柱の建物。梁間全長3.00m，桁行全長3.60mを測る。柱穴は円形又は楕円形で，直径は35～60cm，深さは15～50cmを測り，隅柱が深くしっかりしている。柱径は痕跡より12～15cm位。埋土は黒褐色粘質土を主体とし，掘方には地山ローム土を混える。

出土遺物　土師器の細片が21点と白磁碗の小片１点，剝片が２点，焼土ブロックが少し出土した。

SB13（Fig. 12，PL. 6）

SB09と重複する２×２間の側柱建物で主軸方位をN-75°-Wに取る。一辺2.40mを測る。西側間柱が確認されていない。柱穴は円形又は楕円形で，直径25～40cm，深さ10～40cmを測り，Ｐ３が極めて深い。埋土は黒褐色又は暗褐色粘質土である。

出土遺物　土師器・須恵器の細片が合せて３点と，黒曜石の剝片が２点出土した。

SB15（Fig. 12，PL. 6）

調査区南西隅で検出した主軸方位をN-66°30′-Wに取る１×１間の建物。梁間全長2.90m，桁行全長3.10mを測る。柱穴は円形又は方形で，直径80～90cm，深さ50～85cmと大きく，深い。柱穴はＰ１・２の痕跡より15～25cm位が予想される。埋土は黒褐色粘質土である。方形の竪穴住居址の可能性もある。

出土遺物　土師器の細片が12点と，黒曜石の剝片が２点出土した。

土坑

SK10（Fig. 12，PL. 6）

調査区南西隅で検出した主軸方位をN-39°-Wに取る焼土坑。平面形状は不整楕円形を呈し，規模は長さ0.87m，幅0.61m，深さ25cmを測る。断面は船底形を呈す。周壁は焼けているが，底面は焼土面がない。埋土は上下２層に分かれ，上層は暗褐色粘質土，下層は上層に炭化物を多く混入する。

表１　掘立柱建物一覧表

建物番号（ＳＢ）	規模（柱間数）	主軸方向	梁間		桁行		床面積（m²）	方位	備考
			実長(cm)	柱間寸法(尺)	実長(cm)	柱間寸法(尺)			
09	２×２	北東	360	6.6	330	5.5・5.5	11.9	N—21°—E	総柱
13	２×２	西北西	240	4.5・3.5	240	4・4	5.8	N—75°—W	側柱？
15	１×１	西北西	310	10.3	290	9.7	9.0	N-66・30′-W	

出土遺物　土師器の甕や須恵器のⅣ期位の杯身の細片。黒曜石の剝片が少し出土した。

SX01～04（Fig. 13，PL. 2）

調査区東側で検出した大型の不定形土坑。底面は凹凸が激しい。この種の土坑は南側の第114次調査区でも検出されている。埋土は地山土ブロックを主体とする土であり，しまっていない。

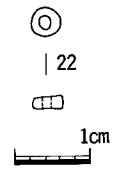


Fig.11 SK08出土玉(1/1)

出土遺物（Fig. 14，PL. 7）　古墳時代の土師器や須恵器，中世の土師器・陶器・青磁，近世以降の梁付などの陶磁器・瓦などがあり，またプラスチック，コークスもあり，比較的新しい時期が考えられる。

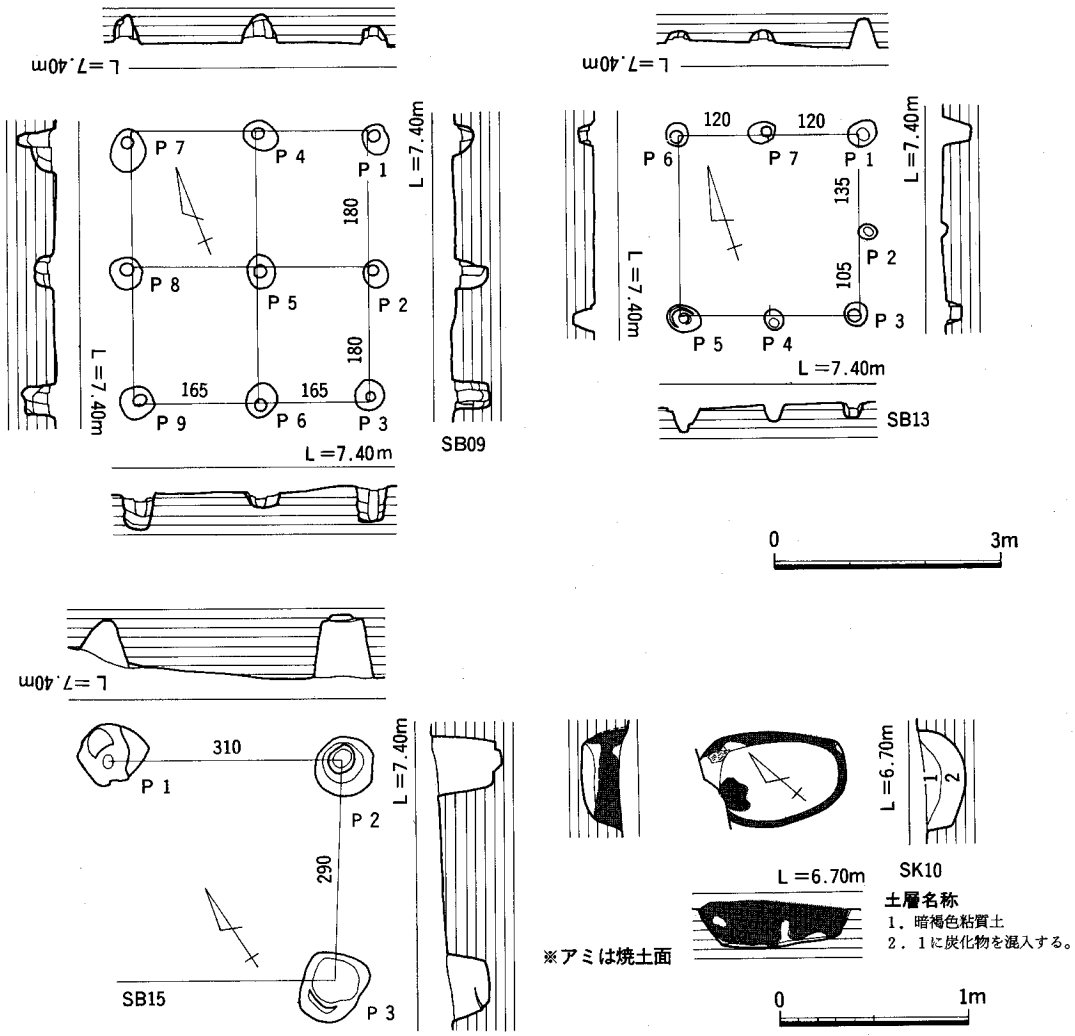
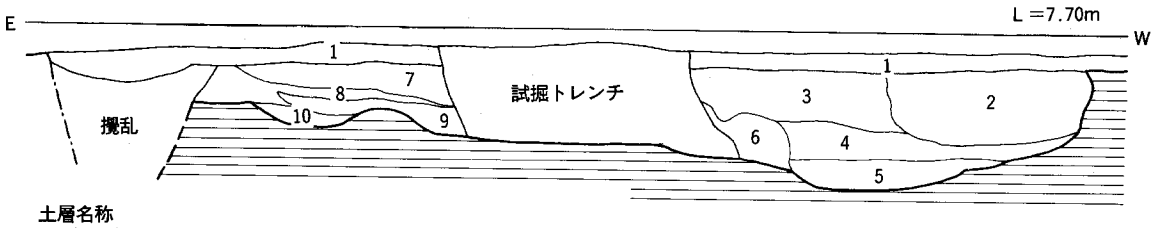


Fig.12 SB09・13・15，SK10（1/100，1/30）



土層名称
1．表土（耕作土）
2．暗褐色土に明褐色砂質ロームブロックを混入
3．暗褐色土と明褐色砂質ロームブロックの混合
4．黒褐色粘質土に明褐色砂質ロームの混入
5．明褐色砂質ロームブロックに黒褐色砂質土と褐色ロームブロックの混入（しまらない）
6．黒褐色粘質土と明褐色砂質ロームブロックの混合
7．暗褐色土に明褐色・褐色ロームブロックの混入
8．7よりロームの混入少ない。
9．明褐色ロームブロック・褐色ロームブロック・暗褐色土の混合
10．褐色ロームブロック

Fig.13 SX01・04南壁 土層図（1/60）

23は陶器の擂鉢底部1／6片。復元底径12.1cmを測る。高台部は露胎であるが，他は褐釉がかかる。おろし目の条線は深く，密できちっとしている。

ピット・その他の遺物（Fig. 15，PL. 7）

24はSP25，25はSP56出土で，いずれも土師器。24は甕の口縁部片で，復元口径15.0cmを測る。口縁部は短く，わずかに外に開き，体部の丸みは少なく，全体にボテットした感じの器形である。体外面は荒れるが木目直交の横位叩き，内面は指おさえ痕が残る。25は高杯の脚部片で，復元脚端径は10.0cmを測る。やや厚みのある器壁で，直径7㎜の透孔が2ケ所入ると思われる。器壁は荒れ調整は不明。

26は黒曜石製の「福井型」の楔形細石核である。打面は細石刃剥離面側からの一回の加撃で形成されており，剥離面付近にはすべり止めの擦痕が認められる。打面後方に素材礫の自然面が残る。頭部調整あり。片面に打面からの側縁調整剥離痕がある。細石刃剥離面の数は8つ。

3．小　　結

以上調査の概要について述べたが，ここではそれらの若干のまとめを行う。当調査区の遺構の年代は弥生時代から近代までの時期に及ぶが，大きく3時期に区分出来る。

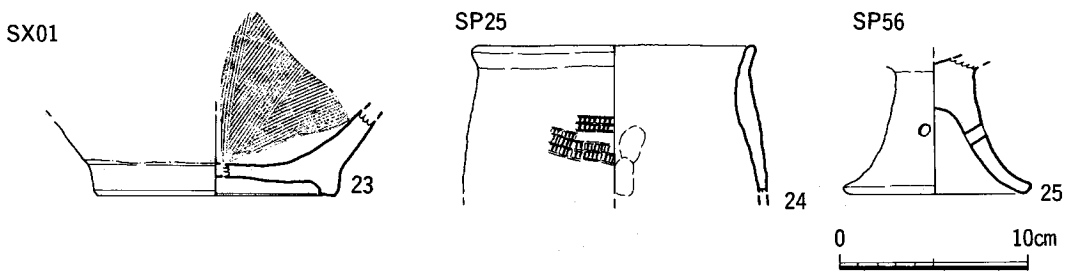


Fig.14 SX01・ピット出土遺物（1/4）

Ⅰ期はSC06の時期である。この住居址は韓国忠清南道にある松菊里遺跡で検出された住居に類似するもので，『松菊里型住居』と一部で呼ばれている。中間研志氏はこの種の住居を規模や形態，柱穴などの在り方などから分類整理[註1]し，古期，新期，発展型の３期に分類し，古期を夜臼新期～板付Ⅱ式古段階，新期を弥生時代前半後半～中期前葉としている。この分類に照らしてSC06を見れば，発展型とすることが出来る。時期についてであるが，出土遺物がほとんどないので，判断は出来ないが，当遺跡群内では第48次地点の第８号住居址が氏により発展型とされており[註2]，それは報告書では中期前半迄と位置づけられている。有田遺跡群では第100次地点，138次地点などでも同様の住居址が検出されている。

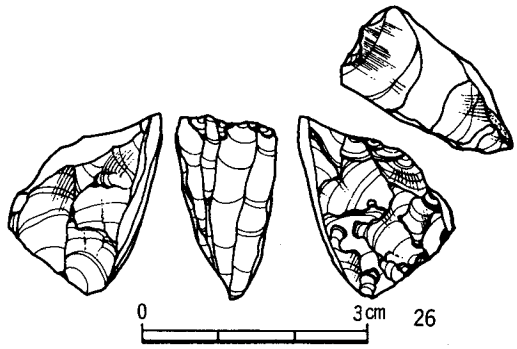


Fig.15 SP19 出土石器 (1/1)

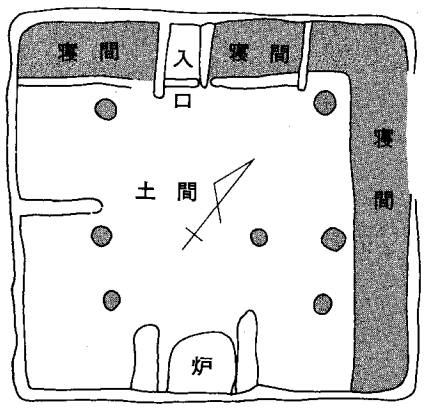


Fig.16 SC05 部屋割概念図 (1/120)

Ⅱ期はSC05・07の時期である。出土土師器が糸島平野の御床松原遺跡における編年のⅤ期に当てる事が出来，５世紀前半代[註3]に位置づけられる。またこの時期は古墳時代前期の２本主体のベッド状遺構を伴った長方形プランの住居から４本主柱の方形プランの住居への転換期にあたり，筑後平野の塚堂遺跡などではカマドが検出され、この時期からカマド付住居が発生したとされている。早良平野ではこの時期明確なカマド付住居は確認されていないが，未報告ではあるが第142次地点の同時期の住居に壁沿に焼土面を有すものがあり，カマドの存在を予想させるものもある。SC05の住居空間の使用について，『古墳時代の研究２』で笹森健一氏が事例として述べている例を参考にして，Fig.16で検討を加えてみた。また特記すべきこととして[註4]同時期と思われるSC05内の屋内土坑SK08の遺物１がSC07柱穴埋土の遺物と接合しており，SC05がSC07と同時期か若干新しい可能性がある。

Ⅲ期はSC11の時期で，須恵器が小田富士雄氏編年のⅢｂ期に相当するが，杯身などで天井部と口縁部に明瞭な段を有する特徴や，その口縁内部に段を有する点など若干古式の特徴を残す。

掘立柱建物については３棟確認したが，時期を決めうる遺物がなく，判断はむつかしい。南側の第15次・114次調査区を合わせて，19棟検出されているが，大きく尾根筋に沿って並走するもの，斜面に直交するもの[註5]，斜面に斜交するものの３類に分類出来る。

以上まとめを述べたが，紙面の都合上充分な検討を加える事は出来なかった。今後機会があれば再度検討を加えてみたい。

表２　遺物一覧表

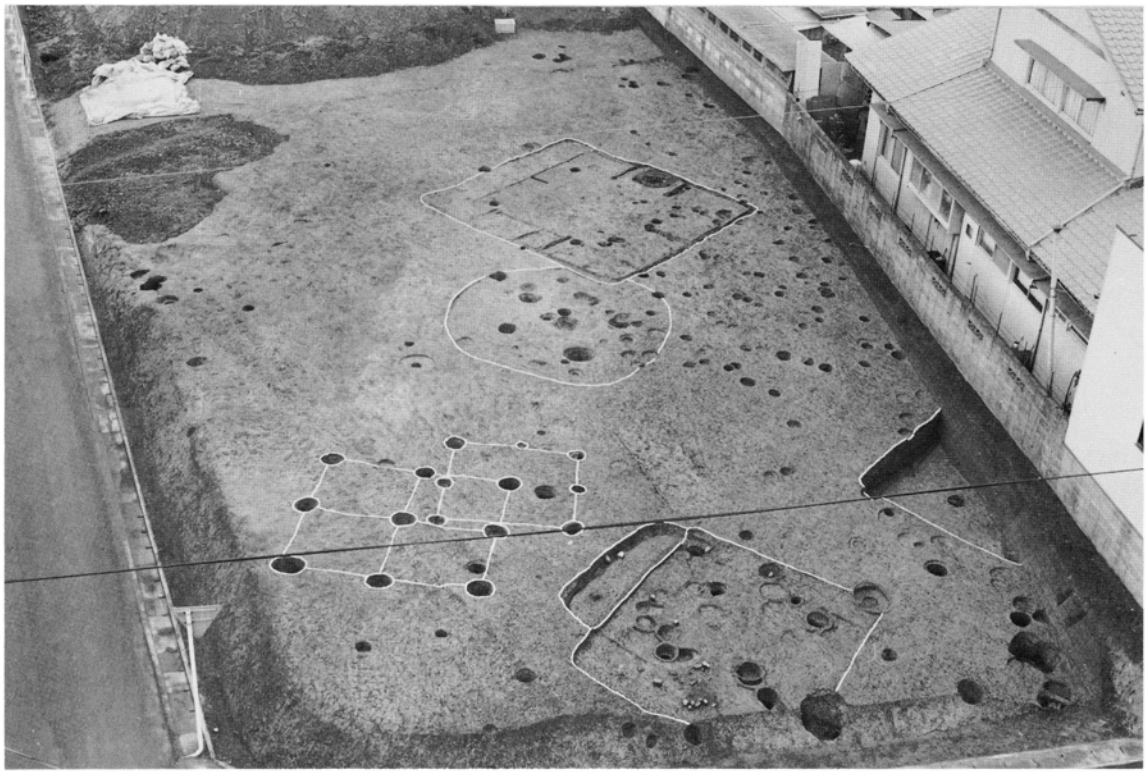
遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物・種類	口径	底径(脚)	器高	調整	色調(外面)	その他の特徴	登録番号
1	4	7	SC05内 SK08③ SP58	小形 土師・丸底壺	9.2～9.5			外面　ナデ　全体に器壁は荒れる 内面　口縁部指オサエ、体部ナデ	橙褐色	胎土、石英・褐色粒を若干含む	00020
2	〃	〃	SC05内 SK08	〃・〃	10.0			外面　口縁から体上部ヨコナデ、下ケズリ 内面　〃　指オサエ	暗橙色	1/6片 胎土、雲母粒若干混	00002
3	〃	〃	SC05内 SK08①	〃・高杯	17.0			外面　器壁は荒れる。タテハケ残る 内面　〃　指オサエ	〃	胎土、1～2㎜石英粒混入	00019
4	〃	〃	SC05内 SK08⑥	〃・〃	11.8			外面　器壁は荒れる 内面　指オサエ	橙色	胎土、石英微粒若干混	00021
5	〃	〃	SC05内 SK08④	石器・磨石	全長　25.6 幅　10.1 重量　1990g			全面　すっているが、剝離が激しい		砂岩質か	00022
6	8		SC07 FR1	小形 土師・丸底径	10.4			外面　ハケのちナデ消し 内面　ハケのちナデ	淡橙褐色	1/3片 胎土、石英微粒若干混	00004
7	〃		SC07 P1(SP58)	〃・甕	15.0			外面　口縁ヨコナデ、体部ハケ 内面　体部ヘラケズリ	橙色	1/3片、石英・茶色の粒子多量混入	00026
8	〃		SC07 南壁沿	〃・〃	16.2			外面　口縁ナデ　体部ハケのちナデ 内面　体部ヘラケズリ	褐色	1/6片	00006
9	〃	〃		〃・鉢	7.6			外面　ハケのちナデ 内面　指オサエのちナデ	橙褐色	1/4片　胎土・石英微粒を若干混	00007
10	〃		SC07 中層とP1	〃・高杯	16.0			外面　ハケのちナデ 内面　杯部ハケのちナデ消し、脚部ナデ	〃	胎土　石英粒を多量混入	00003
11	〃	〃	SC07 P1	石器・砥石	全長　10.0 重さ　134g			全側面　使用している		石質はアプライトか	00027
12	10	〃	SC11	須恵・杯蓋	13.4			外面　ヨコナデ、天井　回転ヘラケズリ 内面　ナデ	明灰色	1/4片、胎土、石英粒子を若干含む	00014
13	〃	〃	SC11 上層	〃・〃	11.6			外面　ヨコナデ、天井回転ヘラケズリ 内面　ナデ	青灰色	1/8片、胎土、石英微粒子多く含む	00028
14	〃		SC11 上層	〃・杯身	受部径 10.6　13.0		4.5	外面ヨコナデ　底部回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ　底部ナデ	灰色	1/4片	00017
15	〃		SC11② SP60	〃・〃	受部径 12.0　14.2		4.0	外面　ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	淡灰色	内・外面ヘラ記号あり	00001
16	〃		SC11④	〃・甕				外面　木目直交横位タタキ 内面　同心円タタキ	明灰色	胎土、石英粒を若干多く含む	00013
17	〃		SC11⑧	坩又は 土師・丸底壺				外面　器壁荒れ、調整不明 内面　指オサエ	淡黄色	1/4片、胎土・石英粒若干混入	00011
18	〃		SC11①	〃・甕	23.0			外面　器壁荒れ調整不明 内面　〃	淡灰黄色	1/10片、胎土・石英微粒を多く含む	00009
19	〃		SC11①	〃・高杯				外面　器壁荒れ調整不明 内面　〃	橙褐色	胎土・石英微粒を若干含む	00008
20	〃		SC11①	〃・高杯	15.0			外面　器壁荒れ調整不明 内面　〃	橙色	1/3片、胎土・石英粒を若干含む	00012
21	〃		SC12①	石器・凹石	全長　15.1 最大径　10.6 重量　13.8g					砂岩製	00016
22	11		SC05内 SK08	玉・臼玉	直径　0.4 厚　0.15 孔径　0.2					滑石	00018
23	14		SX01	陶器・擂鉢	12.6			外面　褐色釉がかかり、高台部、露胎でケズリ 内面　〃　、目の細い条線が入る	明褐色	胎土　灰色で精良	00023
24	〃		SP25	土師・甕	15.0			外面　器壁は荒れるが木目直交縦位タタキ 内面　指オサエ	橙褐色	胎土　石英粒を若干含む	00024
25	〃		SP56	〃・高杯	10.0			外面　器壁は荒れ、調整不明 内面　〃　〃	橙色	胎土、石英粒を多量に含む	00025
26	15		SP19	石器・細石刃核	全長　2.4						00033

註１　中間研志「松菊里型住居」岡崎敬先生退官記念論集『東アジアの考古と歴史市』 1987
註２　福岡市教育委員会『有田・小田部第５集』福岡市埋蔵文化財報告書第110集　1985
註３　志摩町教育委員会『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第３集
註４　笹森健一「竪穴住居の使い方」古墳時代の研究２『集落と豪族居館』 1990
註５　第15次は昭和53年（1978）調査，第114次は昭和61年（1986）調査

図　　版

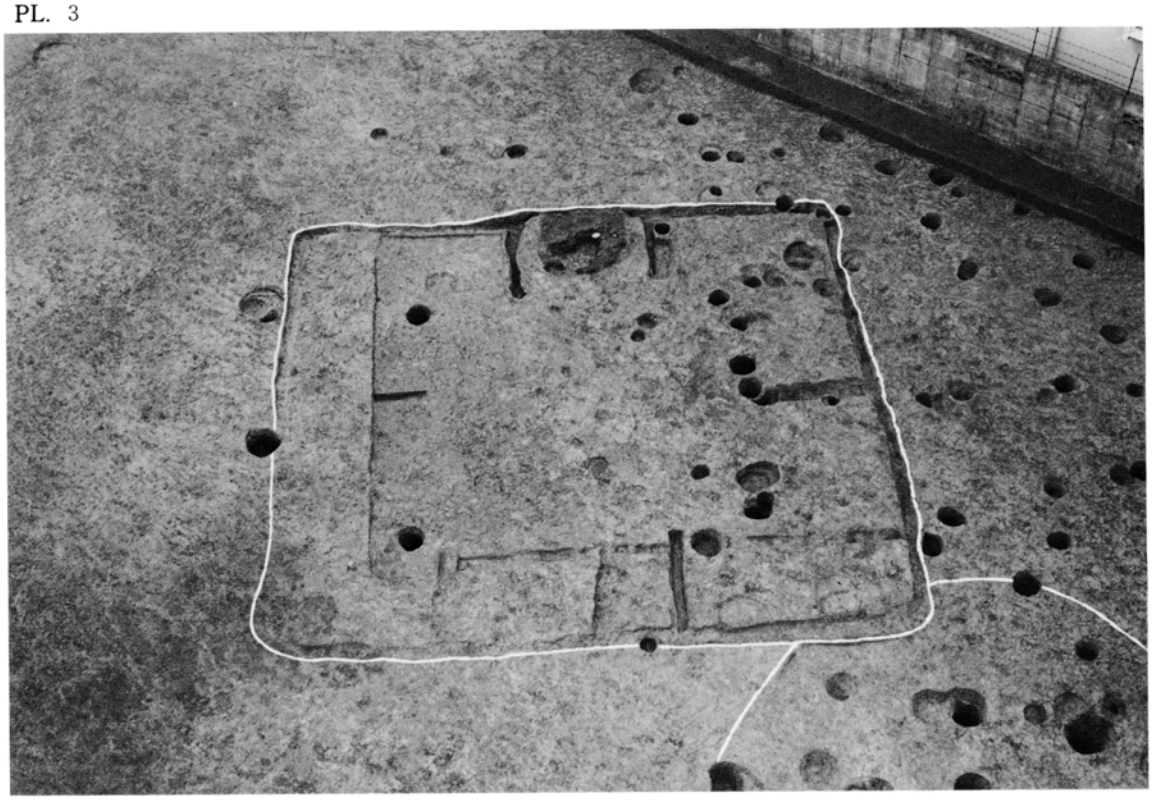
(1) 調査前全景（南東から）

(2) 調査区東側全景（西から）



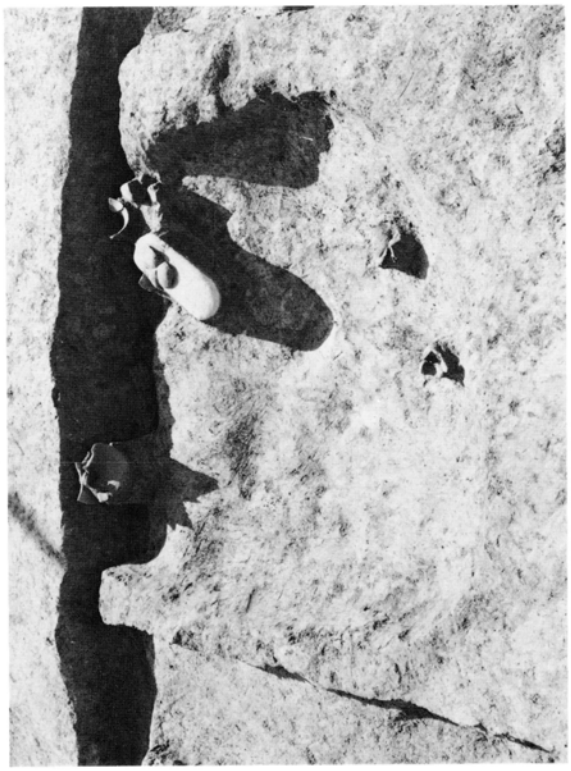
(1) 調査区西側全景（北西から）

(2) SX01・04（南東から）



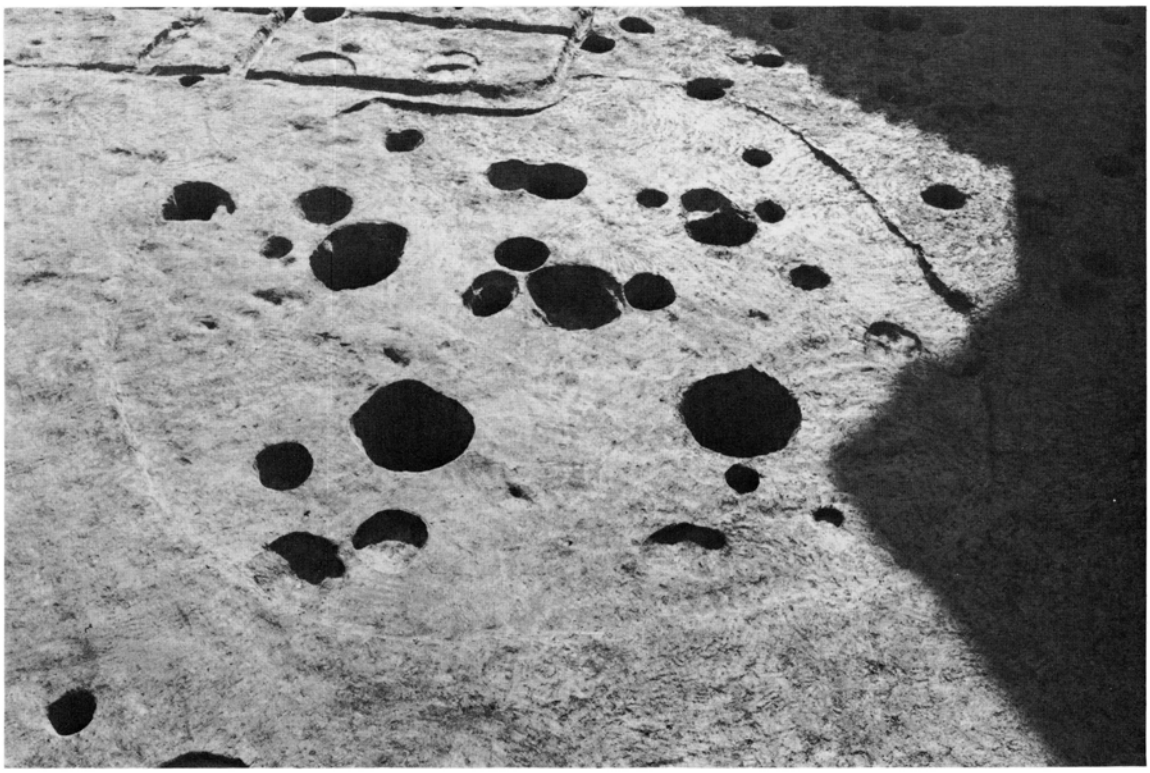
(1) SC05（北西から）

(2) 屋内土坑SK08（北から）

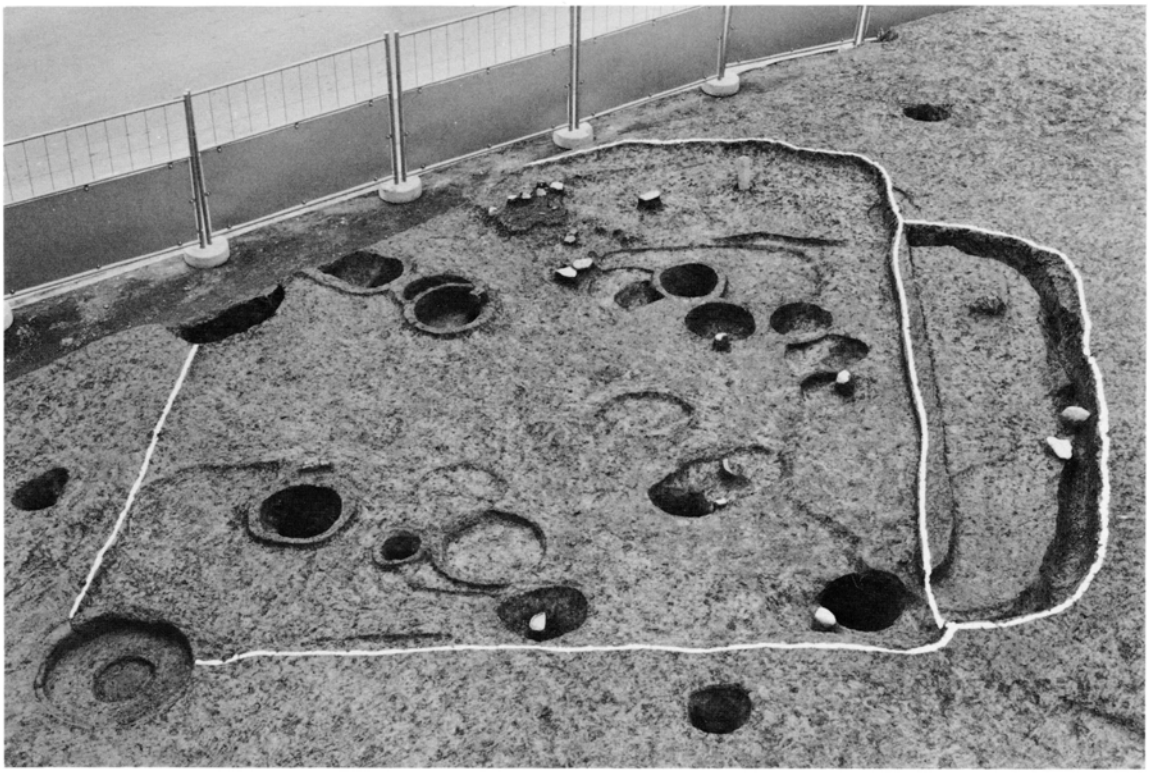


(3) 同完掘状況（北から）

(1) SC06（北西から）

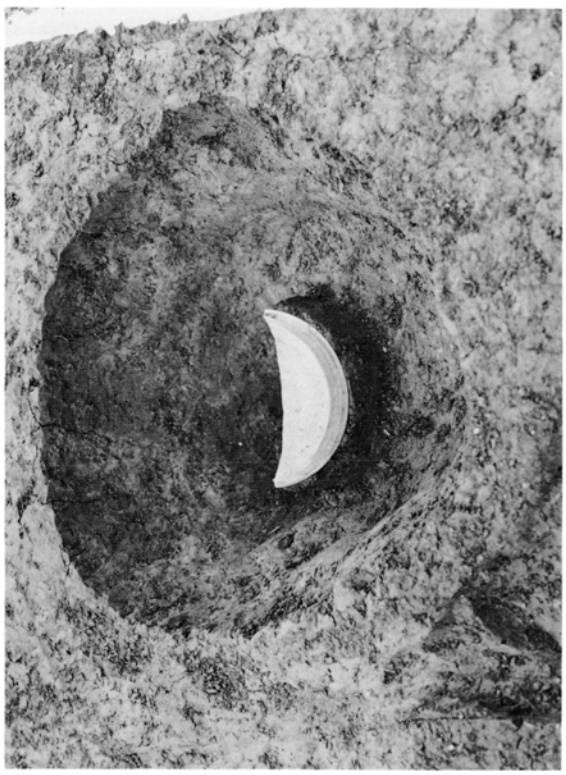


(2) SC07（北西から）

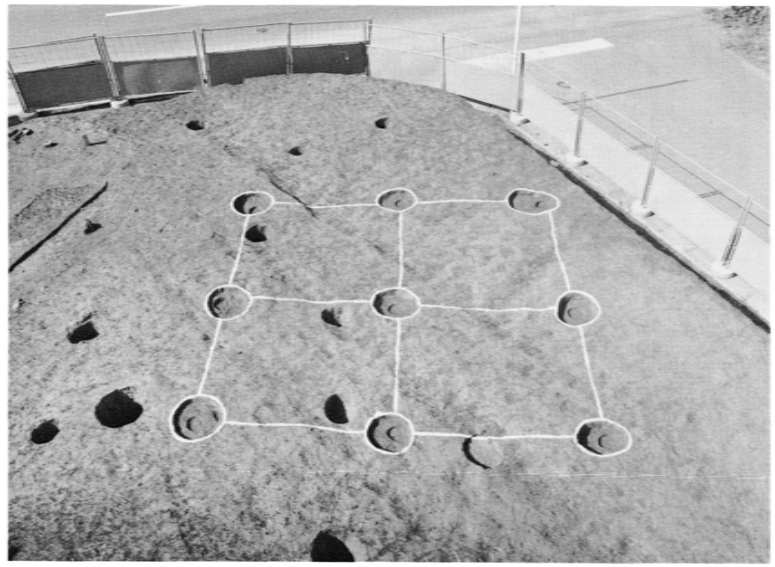


(1) SC11・12（南東から）

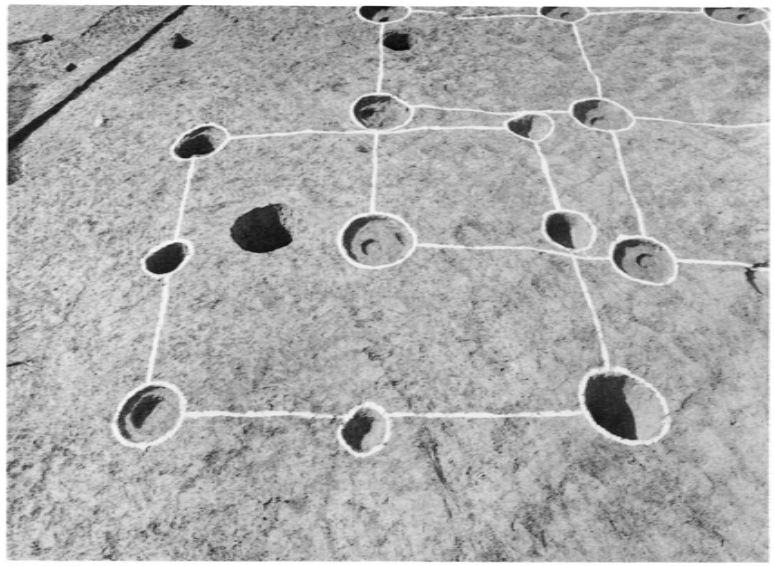
(2) SC11焼土面（南東から）



(3) 遺物出土状況（南西から）

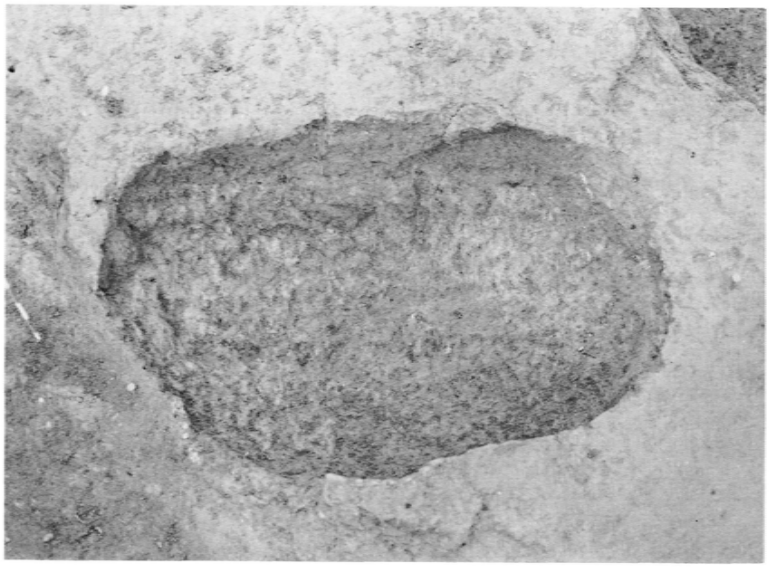


(1) SB 09（東から）

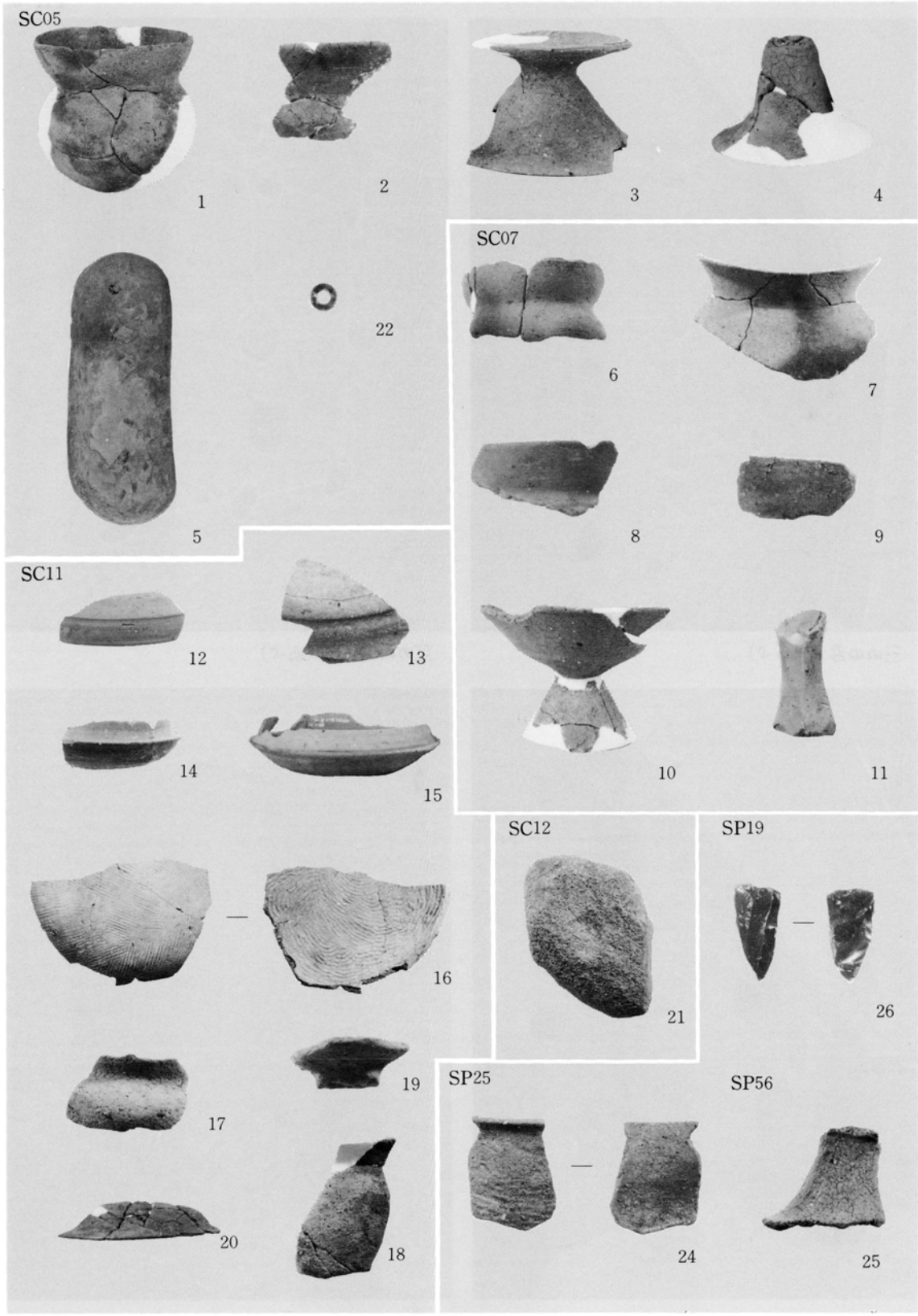


(2) SB 13（南東から）

(3) SB 15（北東から）



(4) SK 10（南西から）


SC05
1
2
3
4
5
22
SC07
6
7
8
9
10
11
SC11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
SC12
21
SP19
26
SP25
24
SP56
25

各遺構出土遺物

有田・小田部 第13集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第265集
1991年（平成3年）3月15日
発　行　福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神
1丁目8の1
印　刷　正光印刷株式会社

有田・小田部遺跡第13集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第265集

1991

福岡市教育委員会